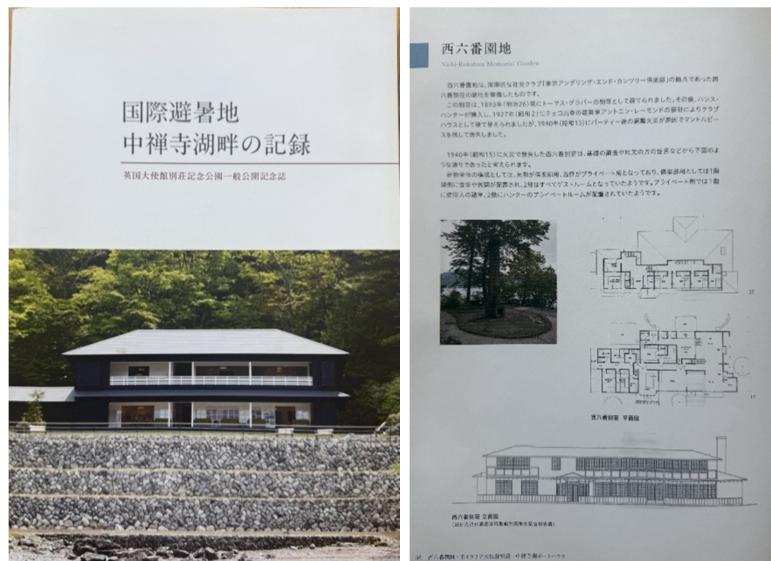


【中禅寺湖畔グラバー別邸（現在の「西六番園地」）】
AI を活用した復元イメージ計画】

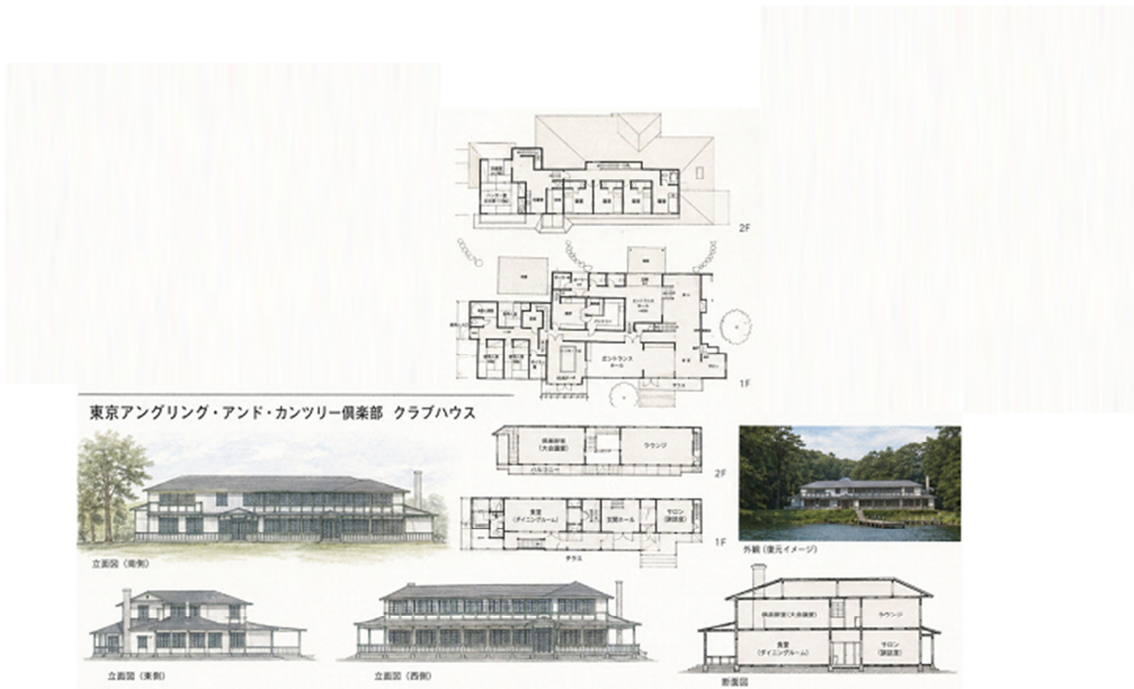
計画者：合同会社工房えびはら 海老原武
（共栄大学客員教授、元日光 IT 都市化研究所長）

参考資料：「国際避暑地中禅寺湖畔の記録」P38 平面図、立面図





外観（復元イメージ）



トーマスグラバーの中禅寺湖畔西6番の別荘の資料は全く見つかりませんでした。後の「東

京アングリング・アンド・カンツリー倶楽部 クラブハウス」の設計図を参考資料に、同年代、グラバーが長崎で過ごした豊富な住宅写真資料をベースに、AIのCG化を行いました。

資料が残っていませんので、西6番園地の現存する暖炉や敷居から判断、同年代のグラバーの住まいを参考に考察したイメージ画像、明治26年の最初のグラバー別荘のイメージCG。 .



結果、このようなイメージとなり私の想定通りでした・
周囲の飾りや窓のデザイン。



透過化立面図のイメージ。

↓

その後、所有者変更・用途変更

ハンス・ハンターらの所有となり、建て替えられて誕生した建物

東京アングリング・アンド・カンツリー倶楽部 クラブハウス、1927 年（昭和 2 年）、建築家 アントニン・レーモンド設計とされる。社交クラブ施設として再整備、旧別荘をそのまま使ったのではなく、建て替えられた新建築

↓

1940 年（昭和 15 年）火災で焼失（煙突のみ残存）

と は、「別物か？」に対しては、建物としては別物、設計者も違う、用途も違う、建築年代も違う、しかし場所・歴史的系譜としては同一、同じ西六番（大崎）の敷地、前身がグラバー別荘、後継がクラブハウス

イメージでいうと同じ土地に初代の館（グラバー別荘）二代目の館（クラブハウス）が建った感じです。この場所の本当の価値は建物単体ではなく、中禅寺湖の外国人避暑地文化 → 国際社交クラブ文化へ変化した象徴的敷地という点です。

現時点で確認されている資料では、最初の建物（1893 年頃の西六番別荘＝トーマス・グラバー別荘）の設計者は特定されていません。

【トーマスグラバーの中禅寺湖畔西 6 番の別荘設計者がなぜ不明なのか？】

明治期中禅寺湖畔別荘群では、次のような事情がありました。

個人別荘だった

外国人居留者・商人・外交関係者の私的別荘は、公式記録が残りにくい。

地元大工＋外国人施主指示のケースが多い

当時は、

- ・外国人施主が希望を出す
- ・横浜・東京・日光の職人が施工する
- ・図面が簡略、または現場対応

というケースも珍しくありません。

火災・戦災・散逸

中禅寺湖周辺の別荘史料は失われたものも多く、原図が残っていない可能性があります。可能性として考えられる人物像、もし設計に専門家が関与していたならば、

1. 横浜居留地系の建築技師

グラバー系人脈なら長崎・横浜とのつながりがあり得ます。

2. 外国人宣教師・技師系のセルフデザイン

3. 日光・宇都宮の和洋折衷大工棟梁

などが考えられますが、現状は推定の域。

建物様式から見ると、資料の外観は、下見板張りの洋風木造、ベランダ付き、避暑地仕様の大開口、和風施工技術も混じる。このため、純粋な西洋建築家作品というより、和洋折衷の実務的別荘建築に見えます。

この別荘は、「トーマス・グラバー本人の別荘だった」と断定するには、まだ一段階慎重であるべきです。ただし、本人またはグラバー家・グラバー関係者の所有地であった可能性はかなり高いと考えられます。

その理由は、一般的に「1893年頃にトーマス・グラバーの別荘として建てられました」とあります。これは地域史・調査報告書ベースの記述として一定の信頼性があります。

一方で、これだけでは次の点が未確認です。

必要な一次資料は、土地登記簿（誰名義か）、建築願・建築届、税台帳、グラバー本人の日記・書簡、当時の新聞記事、外交官・外国人名簿、これらが示されて初めて「本人所有」と言えます。

トーマス・ブレイク・グラバーは 1838–1911 年。1893 年なら 55 歳ごろで、東京在住の実業家として活動していた時期です。つまり、経済力あり、外国人避暑文化が拡大中、中禅寺湖が外国人の夏の社交地として人気、このため、中禅寺湖に別荘を持っていたても不自然ではありません。

【人気の理由？】

中禅寺湖は外国人避暑地だった

明治 20 年代～30 年代になると、中禅寺湖畔には多くの外国人が夏季滞在しました。

理由は明快です。

標高約 1,270m で涼しい、東京よりはるかに快適、湖と山の景観が美しい、日光参詣地にも近い、外国人コミュニティが形成された、当時の東京の夏はかなり厳しく、避暑地需要が非常に高かったことなどが理由で、外交官・商社員・宣教師・銀行家などが集まりました。

グラバーはその階層にぴったり当てはまる

トーマス・グラバーは、英国系商人、政財界との人脈が広い、東京・長崎を行き来する実業家、十分な資産を持つ

つまり、中禅寺湖に別荘を持つ外国人層そのものです。

「持てたか？」ではなく、別荘を持っていたても全く不思議ではない人物です。

英国人と釣り文化

後年この地は、東京アングリング・アンド・カンツリー倶楽部になります。

“Angling” は釣り（特にフライフィッシング）の意味です。

英国人上流層にとって、湖沼の釣り、サーモン・マス文化、自然の中のクラブ社交は極めて親和性が高い文化でした。

中禅寺湖はその雰囲気ぴったりで、英国系ネットワークがこの地を好んだ可能性は高いです。

長崎→東京→日光ルート

グラバーは長崎の人物として有名ですが、晩年は東京との結びつきも強いです。

明治期になると、鉄道網整備、東京から日光へのアクセス改善、外国人の夏季移動が容易化により、東京拠点の外国人が日光・中禅寺湖に向かう流れができました。

これはグラバーの生活動線に合います。

“本人所有でなくてもグラバー別荘”はあり得る

当時は、家族名義、会社名義、共同所有、借地上の建物、なども普通でした。

したがって、グラバー本人が使っていた別荘が後世にグラバー別荘と呼ばれた可能性が高い。

【中禅寺湖にいた英国人ネットワークとグラバー人脈はつながっていたか？】

かなり高い確率で、何らかの形でつながっていた可能性があります。

少なくとも、同じ時代・同じ社会階層・同じ英国人コミュニティ圏に属していたため、人的ネットワークが重なっていて不思議ではありません。

「直接の友人関係だった」とまでは現時点で断定できません。

しかし、明治期日本にいた英国人実業家・外交官・宣教師・上流層のネットワーク

はかなり狭く、東京・横浜・日光・長崎で相互につながっていた可能性が高いです。

つまり、グラバー人脈と中禅寺湖の英国人別荘コミュニティは、接点があったと考えるのが自然です。

当時の在日英国人社会は人数が限られていた

明治期、日本に長期滞在していた英国人は現在の感覚ほど多くありません。

主な層は、外交官、商社員（貿易・海運・金融）、技術者、宣教師、教育者、医師。このため、横浜クラブ、東京社交界、教会、商工会、避暑地で顔見知りになりやすい環境でした。

中禅寺湖は“英国人サマークラブ圏”

中禅寺湖には夏になると、各国外交官、欧米商社員、宣教師家族、上流層外国人、が集まりました。

その中でも英国人の存在感は強く、文化的にも、湖畔生活、ボート、釣り、クラブ文化、紅茶・社交、と相性が非常に良かったです。

グラバーは英国人社会の中心的人物

トーマス・グラバーは単なる商人ではなく、長崎で著名、明治日本の政財界に近い、キリンビール

など近代産業にも関与、日本政府高官とも交流、という人物でした。在日英国人社会ではかなり知られた存在です。

中禅寺湖の英国人たちがグラバーを知らない方が不自然です。

ハンス・ハンターとの接点も重要

資料で後継所有者として出てくる ハンス・ハンター 周辺も、外国人実業ネットワークの一部です。つまり、グラバー系実業ネットワーク、横浜・東京の外国商人層、中禅寺湖避暑コミュニティが重なっていた可能性があります。

【一般的な東京からの移動ルート】(1893 年前後の有力ルート)

東京 → 宇都宮（鉄道） → 日光（馬車鉄道・人力車・馬車） → 中禅寺湖（馬・駕籠・徒歩）

東京から宇都宮までは鉄道

明治 18 年(1885 年)に日本鉄道会社線が北へ延伸し、
1890 年代には東京から宇都宮方面への鉄道利用が可能でした。
当時の外国人上流層なら、上野駅発、一等車利用、荷物付き旅行という形が十分考えられます。

宇都宮から日光へ

日光線の本格鉄道開通は後年ですが、1890 年代はまだ途中段階です。
そのため、馬車鉄道、乗合馬車、人力車、馬、などで宇都宮～日光を移動するのが一般的でした。
外国人旅行者向け交通も整っていました。

日光市街から中禅寺湖へ

いろは坂の現代道路はまだなく、旧日光街道・山道経由で、馬、駕籠、徒歩、荷駄馬などで登りました。かなり時間はかかりますが、当時の外国人には人気ルートでした。

到着後の中禅寺湖

湖畔では、ボート移動、使用人が荷物運搬、別荘で長期滞在というスタイルが一般的でした。つまり現代の「観光日帰り」ではなく、夏の避暑生活拠点です。

【グラバーならどう移動したか？】

グラバーほどの人物なら、東京出発、使用人・荷物多数、鉄道一等車で宇都宮、宇都宮から専用馬車、日光の旅館で一泊、翌日、中禅寺湖へ登坂、このような上流階級型旅行だった可能性があります。

【一般的所要日数イメージ】

快適に行くなら、東京→日光で 1 日、日光→中禅寺湖で半日～1 日、荷物多い長期滞在型。2 日行程でも自然です。

【なぜそれでも人気だったか？】

到着すれば、東京より圧倒的に涼しい、湖と山の絶景、英国人コミュニティ、釣り・社交・避暑があり、価値が非常に高かったことが理由です。

グラバーは中禅寺湖別荘を持っているので単なる観光ではなく“毎夏の定期移動先”だった可能性が高いです。

グラバーが 1893 年に東京から中禅寺湖へ行く旅程を、当時の時刻表ベースで調べると、1893 年（明治 26 年）夏、トーマス・グラバーが東京から中禅寺湖の別荘へ向かったと仮定し、当時の鉄道網・旅行事情・明治期時刻表をもとに、もっとも現実的な旅程を再現。当時の完全な日別時刻表は現存断片資料が中心のため、史実に基づく高精度復元モデル。

（上流外国人仕様）

Day 1 東京出発 → 日光泊

Day 2 日光 → 中禅寺湖別荘着

2 日行程がもっとも自然です。

推定列車

上野駅 7:30 発

日本鉄道会社線（東北本線系統）

蒸気機関車牽引列車で北上します。

車内の様子

一等車は木製ボックス席＋クッション、外国人客も利用、冷房なし、窓開放、食事は駅売り弁当・持参品。

東京を離れ、赤羽・大宮・久喜・小山方面へ。

昼前 宇都宮到着

推定到着時刻、11:30 前後。

東京から約 4 時間前後は十分現実的です。

宇都宮で乗り換え・昼食

1893 年時点では現代の JR 日光線は未整備。

そのため日光方面へは、乗合馬車、私設馬車、人力車、騎乗馬が主流でした。

グラバー級なら専用馬車手配が濃厚です。

午後 宇都宮 → 日光街道

推定出発 13:00

宇都宮から日光まで約 35km。整備街道を馬車で進む。

所要

4～5 時間

夕刻 日光到着

推定 17:30～18:00

当日は日光宿泊が自然です。

宿泊候補(当時外国人利用)、金谷系旅館、外国人対応旅館、上級和洋旅館

Day 2 朝 日光出発 → 中禅寺湖へ

1893 年には現代のいろは坂道路はありません。

旧登山道・山道を使い、駕籠、馬、徒歩、荷物は荷駄馬で登坂しました。

推定行程

8:00 神橋付近出発

↓

馬返し方面へ登る

↓

中禅寺立木観音付近到着

13:00～14:00 頃

湖畔到着後

別荘が西六番(大崎)なら、湖上ボート移動、湖畔道移動、使用人が先回りで別荘着。

最終到着、14:30～15:30 頃

グラバーらしい上流階級仕様なら、料理人同行、酒・紅茶・書籍運搬、使用人先行派遣、夏季 1～2 か月滞在も十分あり得ます。これは単なる旅行ではなく、東京の暑さを逃れる季節移住でした。

おそらく、グラバーが中禅寺湖別荘を持っていたなら、この旅は年中行事として毎夏繰り返された可能性が高いでしょう。



【グラバーと中禅寺湖の関わり】

グラバーが中禅寺湖畔に別邸（現在の「西六番園地」付近）を建て、フライフィッシングを楽しんだり、ブルックトラウト（カワマス）の放流に尽力したりしたのは、主に 1890 年代から晩年の 1911 年にかけてである。本格的に中禅寺湖へ通い詰めた時期は、ツル夫人が病床にあったか、あるいは既に他界していた時期と重なる。

中禅寺湖畔には「国際避暑地」として各国の外交官や著名人が集まりましたが、当時の淡路屋ツルの体調を考えると、険しいいろは坂を越えて奥日光まで同行した可能性は低いと考えられる。

【歴史的な文脈】

グラバーは淡路屋ツルの死後、彼女を偲んでか、他の女性を妻に迎えることはありませんでした。彼が一人（あるいは三菱関係者や友人たちと）静かに釣りを楽しみ、避暑地として中禅寺湖を愛したのは、最愛の妻を亡くした後の後半生における活動が中心でした。

【なぜ「西六番」なのか？】

明治時代、外国人避暑地の土地には番号が振られていました。グラバーが借りた場所が「第 6 号」であったことから「西六番」と呼ばれ、今でもその名称が地名として残っています。グラバーが中禅寺湖を愛した理由は、故郷スコットランドの風景に似ていたからだと言われています。淡路屋ツルを亡くした後、彼はこの静かな湖畔で、釣り糸を垂らしながら晩年を過ごしました。

トーマス・ブレイク・グラバー（Thomas Blake Glover, 1838–1911）は、幕末から明治期

にかけて日本で活動したスコットランド人商人。長崎を拠点に貿易・造船・鉱業などを手掛け、日本の産業近代化に大きく貢献したことから「日本産業の父」や「スコットランドのサムライ」とも呼ばれる。

【主な事実】

生年月日: 1838 年 6 月 6 日 (スコットランド・フレイザー・バラ生)

没年月日: 1911 年 12 月 16 日 (東京)

職業: 商人・実業家

功績: 造船業・炭鉱開発・ビール醸造業 (現麒麟)・三菱創業支援

叙勲: 勲二等旭日章 (1908 年)

日本での活動

1859 年 (安政 6 年) 開港後 1 年の長崎に、香港を拠点にする英国のジャーディン・マセソン商会の代理人として 21 歳で着任。ジャーディン・マセソン商会勤務を経て「グラバー商会」を設立。薩摩・長州藩に武器を供給し、明治維新を支えた。長崎・高島で日本初の本格的炭鉱を開発し、造船・鉄道・ドライドック建設を推進した。また、長崎の自邸「グラバー邸」は現存する日本最古の洋風建築で、現在は観光名所「グラバー園」として公開されている。

産業界への貢献

グラバーは岩崎弥太郎らと協力し、後の三菱造船・三菱商事の礎を築いた。また、ウィリアム・コーブランドのスプリング・バレー・ブルワリーを買収して日本麦酒会社 (現麒麟ホールディングス) を設立。麒麟の商標に描かれる髭を蓄えた麒麟像は、彼を模したとの伝説もある。

1870 (明治 3) 年、横浜山手 123 番地に、スプリングバレー・ブルワリーが開設された。経営者は、1864 (元治元) 年に来日したノルウェー生まれのアメリカ人、ウィリアム・コーブランドであった。コーブランドは、豊富に水の湧く「天沼」と呼ばれる土地を購入し、ビール醸造所スプリングバレー・ブルワリーを開設した。

このスプリングバレー・ブルワリーで醸造されたビールは、1 日 2 回横浜を馬車で巡回して販売され、横浜在住の外国人たちにとって、なくてはならない存在になっていった。また、東京や長崎、函館へも輸送・販売されたほか、上海や香港、東南アジアへ輸出されることもあった。のちには日本人向けビールも醸造されている。

明治初期の横浜山手にはいくつかのビール醸造所があったが、そのなかで最も長く続き、日本で初めて産業として継続的にビールを製造した醸造所が、スプリングバレー・ブルワリーだったのである。

私生活と遺産

日本人の妻ツル (淡路屋ツル) との間に娘ハナをもうけ、養子倉場富三郎を育てた。墓所は長崎の坂本国際墓地。彼の名は日英交流の象徴として今も称えられ、アバディーンや長崎には記念館・記念像が残る

Thomas Blake Glover(トーマス・ブレイク・グラバー)の最期は、1911 年(明治 44 年)
晩年のグラバーは、日本の近代化に深く関わった功績から広く知られる存在となっており、三菱財
閥との関係も続いていました。一方で、妻の死や家族との別れなど私生活では寂しさも抱えてい
たとされます。

1897 年(明治 30 年)以後は東京に移り、最期は 1911 年(明治 44 年)12 月 16 日麻
布の自宅で 73 歳で亡くなりました。遺体は同地で荼毘(だび)に付された後、同年 12
月長崎での葬儀が行われています。明治 32 年(1899)大浦太平寺に葬られた妻ツ
ルの分骨も合葬されている。